
何がなんだかわからない日常の破壊について。

Φ～ふぁい～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何がなんだかわからない日常の破壊について。

【Nコード】

N4714F

【作者名】

ゆゝふあいゝ

【あらすじ】

ぼーっとしたくなる秋のある日。四恩寺のクラスメイトにして友達和市ヶ谷が授業に來なくなる。不思議に思った四恩寺は、ミステリ研究会のなな美と一緒に捜査を開始…

一話目：市ヶ谷殺人事件（前書き）

全部で五話か六話になります。

一話目：市ヶ谷殺人事件

秋。

日はより南に傾く昼下がりに。

僕らは五時間目の最中だった。

教室の空気は初秋のけだるさに澱み。

教壇の教師はそんな彼らに向かう。

退屈。退屈な授業。退屈な日々。

だれか壊してくれないものか。

誰かが、僕がそう願ったような。願わないような。

「結局来ないね。市ヶ谷。」

ぼおっとしていた僕に、隣りの麓郷屋がひそつと話しかける。

「珍しいよね。市ヶ谷が休むなんてさ。四恩寺、なにも聞いてないでしょ？」

「ああ。昨日帰る時も、別に普通だったし、病欠なら、朝、鷺草の奴が言うだろうにな。」

「さぼり…かな。」

まあ、そういう事だろうと、僕もそう思った。夏休みが開けて約三週間、ちよつと学校がダレて来る時期である事は間違いない。

市ヶ谷は結局来ず。終業に至る。

僕はすぐさま例の教室へ向かう。

そこは自称：いや名付け親は彼の女であるから、僕からすれば他称となるが…ミステリ研究会の教室。

いつもどおり、彼女は既にして着席していた。僕らはいつもどおりの会話を交わす。

「こんにちは」

できるだけ明瞭な挨拶を心掛ける。

「こんにちは、四恩寺君。」

今日は水曜日か…教室の壁の円盤を見てふと思い出す。

教室…と言っても、ミス研に使うくらいだから、それほど広い部屋ではなく、まあ、7畳か8畳くらいだろうか。入口から見て左側には本棚。（推理小説や事件のスクラップより超常現象関連が多い。）右側は手前の壁に様々な張り紙、曜日とその日の活動内容を示す円盤、将棋盤と人生ゲームが置いてある。

ちなみに自分の活動は…

月曜：休み

火曜：超常現象調べ

水曜：七奈美の占い講座

木曜：探偵ごっこ

金曜：人生占いⅡ人生ゲーム

七奈美とはいま僕の目の前の少女。七が苗字、奈美、名前。気持ち悪い（本人曰く。）ので、なな美と呼ぶのがミス研通例である。

…ちなみにミス研の研究員は四人。僕、なな美、井出頭、虹宮。であるが、井出頭は只今なな美の命令で海外出張中。虹宮は…『遅刻キャラ』の為、まだ来ない。

…とりあえず先に進んでいいかな。こんだけ説明しておけば。

で、今日は水曜日。従って挨拶に引き続き、なな美の質問から始まる。

これは毎週水曜に、必ず行われて、それにより、なな美が僕らを占う…ということになっている。

「じゃあ、行きますよ？」

「…はい。」

「今日の昼食は？」

「いつもどおりのお弁当。おかずはえびふらいと卵焼き、メロン、クラゲとわかめのあえもの」

「おいしかったですか？」

「そこそこ」

「お昼休みは何をしていましたか？」

「委員会があつたんで、出席して寝ていたよ。」

「五時間目の授業は？」

「体育」

「では、六時間目は？」

「数学」

と、そこで少し間を置いて、更に、

「いま、気になる人物は？」

「市ヶ谷。今日休んだからね。」

長い沈黙。

僕寡黙。

長い沈黙。

僕俯く。

「市ヶ谷くんが、休んだんですね？」

「なな美は更にそう聞いて来た。おかしいな。普段ならここで今日の運勢が適当に告げられるハズなのに。」

「今日は木曜日ではない筈なのに。なんと奇遇な。」

「??？」

「まあ、たまにはいいでしょう。虹宮くんにも聞いてみてください。市ヶ谷くんのこと、何か知っているかもしれないですから。」

僕は教室を出て、講義棟へ向かう。

途中古い時計塔の下を通る。

この時計塔、なんでも学校創立時からあつたにもかかわらず、未

だ現役で動き続けている。

塔の下を通って、僕は講義棟四階の3・Cにいるであろう。虹宮星冲を尋ねる。

教室に入ると、やはり、そこにいた。「…はやく来いし。もう完全放課後だろ。」

「……………今日、ここで話すべきこと、ある」

「…まあ、おれもお前に聞きたい事があって来たんだがな。」

「…市ヶ谷」

「そうだ」

「市ヶ谷、帰ってない」

「ん？」

「市ヶ谷、昨日、帰ってない、家」

「本当か」

「妹、話してた、二カイ、で」

妹。一回生の彼の妹、市ヶ谷大月。

実を言うと、市ヶ谷は僕らからすれば良い奴なんだけど、教育機関的にはそうではなく、夜遊びや外泊はいつものことだ。

…じゃあどっか泊まりに行ってるのか。なんだ。

…にしても、大抵そう言う時は、僕に連絡してきそうな物だけだ…。

僕らは一回生の頃からの付き合いで、なかなか仲がよかった。だから、彼が休む（さぼる）時は、大抵僕が連絡していた。

ま、いつか。

「だけど」

「ん？」

「星見、いない」

「なんだ。星見もか。」

虹宮星見。星冲の双子の妹。

「いない」

「そうか、体調不良か？」

「いない」

「そうか」

いない、か。

僕は虹宮と共に教室に戻って来た。

「どうですか？」

「…ただのサボリみたいです。妹曰く、昨日から帰ってないと…」

「そう、ですか」

なな美は何かを考えながら返事した。

結局、なな美は今日は特に何も占わなかった。

歯車歯車歯車歯車歯車歯車歯車。

歯車歯車歯車歯車歯車歯車歯車歯車。

歯車だらけの細長い部屋。

一滴何かが滴り落ちた。

歯車歯車歯車歯車歯車。

時計塔は六時四分前を示していた。

つまり、いまは六時と言う事で、僕らは教室をでた。

「…私はやはり、間違っていると思います。パチンコに油性マジックだなんて…」

「まあ、普通はな、でもその時はどうしようもなかったんだよ。水性じゃかけねえしな。」

「油性、嫌い、うつる。」

僕らは再び時計塔の下を通り、講義棟からエントランスへ向かう。途中、この学校のなかで一番古い建物を通過する。

なぜここを通らないと、エントランスへいけないのだろう…? と思
つてしまつくらい、そこだけはボロボロで、暗い、古い病院のよう
な、怪談のネタになりそうな、ボロボロの建物だ。

…と言うか、ここをネタにした怪談は、当然…。

「このトイレ嫌だよな。」

「水洗になっただけ、マシでしょう。」

僕は校内で一番古いトイレの前を通過する。

このトイレが実際に使われることはまずない。

なにせこの出で立ちだし、講義棟に行けば普通レベルのトイレが
あるからだ。

僕は別に理由もなく、気持ち足早にそこを通過して行つた。

六時というのは、部活動の終了時刻に定められている。

その為、多くの生徒がこの時間にエントランスから出て行く。

しかし

「今日は幾分人が少ないですね」

「…秋だからな、新人戦とかあるんだろ」

確かに、今日はいつもに比して運動部帰りっぽい人があまり見ら
れなかった。

まだ頑張っているのだろうか。ご苦労なことで。

僕は学校を後にする。

夕日に照らされた学校はなにかしら不気味で。

僕はそこからさっさと立ち去らねばならない。そんなオウラを感
じる。

間もなくこの空間には人がいなくなる。

暗闇の中に、ただの闇が広がる場所となる。

暗。

150センチ四方の床。

冷たい陶器。

水の音。

軋む音。

水の音。

軋む音。

闇。

木曜日。

やはり、市ヶ谷は学校を休んだ。

さすがに二日も連絡なく休むなんて…鶯草もさすがに不思議がついていたが、しょうがなく、ホームルームを終えた。

「やっぱり来ないね。市ヶ谷くん。どうかしたのかな。」

麓郷屋がどうしたのかな、という顔をして僕に話しかけて来る。

「さあな。僕にも連絡はないんだ。家にも帰っていないらしいし

…」

「搜索願いとかが、出てないの？」

搜索願い…それは日常を格段に非常へと移りかわらしむるもの。

家族は事を非常たらしめたくないらしく、まだ躊躇しているのだろう。

授業は人一人が二日休んだ位では滞るわけもなく。

今日も昨日と同じけだるい講義が続いた。

誰かがこんな日常を非常へとシフトするんじゃないかと…

…思ったり、思わなかったり。

そんなこんなで今日の日常が終わる。

僕の時計は三時二十分。時計塔は二時四十五分をさしていた。

ずいぶんと時間がずれている。

時計はそのガタイの割に時間を合わせるのは比較的簡単な作りを

しているらしく、（それも自慢の一つ、らしい。）毎週火曜に職員が合わせているんだとか。

毎週合わせるから、古くてもずれないってことだったんだけど…。
：まあ、どうでもいいか。僕はミス研究室へ向かった。
今日も時計塔の下を通る…

「ん？」

時計塔の床の真ん中辺り。

小さな赤黒い染みが二、三個。

小さな小さな染みだから、放って置けば気付かないかもしれないくらい。

しかし、目敏い僕は気付いたのだった。

「なんだこれ。」

血のよう、と言えば言えないこともない感じだった。

それは、赤黒く、廊下にこびりついていた。

ミス研究室に入ると、なな美がいた。

「こんにちは。今日は探偵日ですね。あなたが調べてみたいこと、私が調べて見たいことが一致すると嬉しいのですが」

もちろん市ヶ谷の行方を追うことを提案しようと思ったが、その言葉が喉の先まで出かった時に、遅れた時計塔、廊下に何かがこびりついていた時計塔が脳裏に浮かんた。

「やはり、あなたとミス研にいられて良かったです。」

僕が時計塔のことを言うと、彼女は嬉しそうにそう切り出した。

「今迄、職員の丁寧な扱いもあってか、ほとんどずれることのない時計塔。それが、昨日、今日になって少しずつずれている…。
いまでは三十分以上ずれていますね。今日あたり、臨時的にまた職員が時間を直すでしょうね。そして、きになるのは、あの赤黒い痕ですね。」

「あれはやはり…」

「私の目が正しければ、血痕に間違いないでしょう」

「誰かが鼻血でも出した…てわけじゃないよな…」

「その可能性もゼロではないですが、とりあえずいつて見ましよう」

僕らが教室の外に出た時、丁度虹宮が来た。

「赤い点…時計、下」

着くなり彼女は僕らにそう告げた。

彼女も引き連れ、心なしか急いで時計塔に行つて見ると、先ほどの痕に加え、いま滴り落ちてきましたという感じの血の痕が二つ程床にあった。

自然と3人は顔を上に向ける。

時計塔には天井がなく、そこにはむき出しの歯車が幾つも並んでいる。

「この上…か？」

「昇つてみましょう」

廊下の隅には梯子が一つ付いている。歯車のメンテナンスなんかの為に使われるものだ。

なな美がささつと昇つて行つたので、僕、虹宮も順に昇つて行く。上は歯車歯車歯車歯車だらけ。歯車の合間を縫うように、細い通路が続いている。

僕らは先ほど血痕があつたところの丁度真上に来た。

…その場所はすぐに知れた。

…なぜなら、その歯車だけ、渴きかけのどす黒い血に染まっていたから…。

…細い通路からでは歯車の反対側がどうなっているのかは伺えない。歯車だらけで、行くことも難しそうだ。

「歯車を止める方法はないんですか？」

「わからない。でもいつも職員が時間調節の為にいじってるレバー類の辺りになにかあるかも」

それは下の廊下に備え付いている。

「見る」

虹宮がそう言って梯子を降りて行った。

しばらくレバーをがちゃがちゃいじるをとが聞こえ…

がしゃん

さつきまで比較的せわしなく回っていた歯車がとまった。

遅い歯車も（たぶん）止まった。

僕は歯車の間をうまく渡って、通路からは死角になっている反対側へ行く…

逆側からでは明らかすぎた。

そこには形を失った人間が、壁と歯車の間に挟まっていた。

それはその隙間の広さに合わせて器用に潰れていた。

顔は歯車に埋まっていて見えない…まあ、見ないほうが幸せだろうか。

しかし、僕は制服の下に着ているシャツから、それがだれかわかった。

「これ…市ケ谷だ」

なな美が一生懸命歯車と格闘しながら近付いて来る。

僕は彼女に叫んだ。

「市ケ谷が死んでる！つぶれている！殺されてるみたいだ！」

市ケ谷が死んだ。歯車の中で殺された。

市ケ谷が。

… … … … …

言い様のない沈黙が流れた。嫌な沈黙が。友達の僕を氣遣ってか。

友達の僕を躊躇ってか。

だから。

僕が話をすすめなければ。

「…僕らが知るべきことは、なんでしょうね」

僕は続ける。

「僕らが犯人をつき止める上で必要な情報…」

そうですね…となな美は一瞬間を置く。

「まず、死亡時刻、かつ、彼がここに押し込められた時刻、彼がここに押し込められた理由、殺害方法、場所、場合によっては凶器など、更には彼の交友関係、彼の性質、性格…まずはこちらで見るでしょうか」

「殺害場所はやっぱりここじゃないのか」

「どうでしょう。」

こんな狭い所では生きた人間を殺すのも大変ですし、そもそも市ヶ谷くんがこんな場所に如何にしてやって来たのでしょうか。ここは別に立ち入り禁止と言っわけではないのですが、別に来たいと思う場所でもないでしょう？もちろん、何らかの理由で犯人に呼び出されたのかも知れませんが、少なくとも、他方で殺された、或いは気絶させられて、ここに運び込まれた可能性は、まだ排除すべきではないでしょう」

確かに、ここは殺害に適した場所とは思えないし、死体と歯車の血を除くとここが殺害現場だ、という痕跡も特にない。

いくら何らかの理由で市ヶ谷がここにやってきて、いくら虚をつかれて市ヶ谷が犯人に殺されたとして、なにかしら痕跡も残りそうなもの。いや、残らないのかもしれないが、他方で殺された、或いは気絶させられた、くらいの方が、辻褄は合っている気がする。

「何はともあれ、とりあえず彼が気の毒なので、時計を止めて、出していただきましょう。」

僕は教職、教医などにあとを任せた。

死体をもっと詳しく調べるべきだったのだろうが、友達の潰れた顔を見たくはなかったし、素人の僕らがその死体から得られる情報

なんてほとんどないだろう、と判断したからだ。何しろ他の傷があっても、軀は潰れているのだから、それが潰されたことによる傷か、又は別のタイミングの傷かなんて、判断出来るとは思えない。

と、言うわけで僕ら3人は中庭のベンチに座って話し合った。

「まず簡単なのは、彼があそこに押し込められた時間だろう。

彼が挟まっていた歯車は時計塔の歯車の中では比較的回転の遅いものだったから、彼が押し込められた後に、つまりいったん潰された後は、歯車の回転によって、彼の死体が大きく変形することはないだろう。つまり、歯車の動きを阻害していたものは、少なくとも一日、二日の単位では同じ形をしていたわけだから、歯車にかかる圧力も一定だ。つまり、経過時間と時計の遅れは比例関係にあるってことになる。」

「なるほど、あなたは昨日と今日の時計の遅れ具合を知っていますから、そこから、彼があそこに入れられた時刻が割り出せる…と言うことですね」

「3:20:35分、昨日時間？」

「昨日あそこを通った時間はあまり正確ではないけど、終業後一度ミス研究室に行って、更にその後だから…三時四十分ってどこか。」

虹宮が計算を始める。

「経過、23:40、遅れ31分…初期値、遡ること210分、三時間半…」

「つまり、三時四十の三時間半前…十二時十分…」

「昼休み直前ってわけか。だが、授業中ではあるな…。」

「生徒は授業中なので、その時間に実行はしにくいものの、他人に見られる心配は休み時間よりぐっと少ないですね。教員…とくに授業を受け持っていない教員については、授業を抜け出す必要もないですから、むしろこの時間は、夜を除けば犯行に最適な時間帯でしょう。」

もちろん完全な外部の人間である可能性はゼロではないですが、こ

の御時世、授業中に外部の人間が侵入するのはかなり困難でしょう。生徒の親とかならば、来客として学校内に入ることはできそうですから、後でその日来客がなかったかどうかは調べてみますが」

「…となるとやっぱり、怪しいのは第一に教員、第二に生徒…」

「まずは市ヶ谷くんと交流…良くも悪くも交流のある生徒、先生を調べてみましょうか。着目点は、

・市ヶ谷くんと最近の関係

・昨日の四時限終了時の居場所

・最後に市ヶ谷くんと接触した日時、その時の様子（双方の）

…と、まあこの三点です。ここでポイントは、人は100%の事実を話すことはむしろ稀、ということです。意図的に事実を歪曲している場合は元より、真実を話そうとしても、人は何らかの記憶違い、あるいは不確実な記憶、はたまた言葉の選択ミスなどで、多少事実をゆがめてしまうことは避けられません。

ですから、話を完全に信じ込むのは良くないですし、むしろ事実の歪曲に気付けたならば、そこが何らかの手掛かりになることもあります。ですから、人の話を聞く時は、その内容を吸収するに加え、その内容のどこがどういう風に不確実か、に着目することで、思わぬ手掛かりが得られる場合があります。このことを留意してください」

…と、なな美は何かのプロであるかの如く聞き込みのポイントをレクチャーした。

こんな大事件はミス研創立以来初めてだから、彼女もそれなりに力が入っているのだろう。

不謹慎などと言う話はいまさら議論にも及ばない。

ミス研たるもの、不可思議は解明しなければいけないのだ。

…これは彼女の言葉であり、僕の考えではないが。

とは言ったものの、知人に聞き込みだなんてなかなか難しい。この時点では、誰かを具体的に疑うことはできないから、露骨に現場

不在証明を聞く訳にもいかない。そんなことされたら、誰しもイラストと来るだろう。まして市ヶ谷の友人だったりしたら尚のこと。僕だってまだ、この人間関係を壊したくはないのだ。

と、言う訳で、まずは手頃な所から。クラスのやつらに話を聞いて見ることにした。

彼らはもっとショックを受けるだろうと思っていたが、僕の考えていた（危惧していた）程ではなかった。明日になれば全校的に発表されるだろうから、波はもう少し大きくなるだろうが、今僕の前にいる方たちは、悲しみこそしたものの、ショックを受けたようだったものの、僕との会話が不可能になるほどではなかった。

と、言う訳で、まずは麓郷屋邑。先ほどから出演している僕の隣の席の女の子。

彼女は生徒会役員なので、生徒会室にいた。

この生徒会というのは不思議なもので、確かに仕事が多く、生徒会室に赴くことはよくあることなんだが、麓郷屋含め、彼ら役員は特に用がないときも、こうして生徒会室に集まって雑談に勤むものだそうだった。

僕が生徒会室に入ると、そこには麓郷屋の他、同じく役員の三條烏丸、暮野上がいた。

これは丁度いいのか悪いのか微妙だった。

生徒会長の三條烏丸青柳も市ヶ谷の幼馴染みで、やはり話を聞いておきたい男だからだ。　まとめて話を聞くべきか、個々にするべきか……。

手間は省けるが、何となく三人でセッションというのはやりにくい気がした。

しかし、悩んだ末、ここは敢えて二人まとめて話を聞くことにした。

「どうしたの？四恩寺。生徒会室にくるなんて珍しいね。」

「ちよつと君と三條烏丸に話があるんだけど…今暇？」

「まあ暇だよ。もう学祭も終わったしね」

「じゃあ、ちよつと外、出ようか」「ここじゃだめなの？」

僕は少し考えた。別に碁野上に聞かれたって明日には知られることなんだから、構わない気もしたが。碁野上がいるといないとでは、彼らから聞ける話は違うだろうと思ひ、（これは選択の問題ではないが）碁野上なしで話を進めることにした。

「…碁野上には申し訳ないけれど、かなり内密なことだから、三人だけで話したいんだけど…。」

と、言つと碁野上は

「いいわ、私も帰る所だったから」

彼女は素つ気なく言つた。気を悪くしただろうか…。

僕らは僕の教室で話すことにした。

放課後の教室というのは、意外と人氣がなく、こういうときやそう言うときには、便利だ。

僕は三條烏丸とは面識はあるものの、それほど親しい訳ではなかったから、三人で言うのは彼から話を聞く点ではより楽だった。

「ふう。まあ、明日になればたぶん全校に知られるんだけど…」

そう言つて、僕は話を切り出した。

「…市ヶ谷が死んだ」

凍り付く空氣。止まる時間。

「嘘…」

「嘘じゃない。僕もこんな嘘つくほど悪人じゃあないさ。彼は死んだ。いや…と言うか、この校内で殺された」

事実だとわかりながら、それを受け入れられない二人。取り乱さないだけまし。

しばしの沈黙。

口を開いたのは三條烏丸だった。

「…殺されたってわかるのか」

「ああ、あの死体は明らかに殺されたものだろう。（たぶん）第一発見者の僕が言っているんだ。間違いない」

「…四恩寺が見つけたの？」

「ああ。時計塔の機械室の中でな。その時の詳細は言わないでおく。正直僕もあの映像は早く忘れてしまいたいんだ。忘れることはできなくとも、『過去』にして、霧に隠してしまいたいんだ。…とにかく、彼は殺された」

そして、できるだけ早く話を進めたかった。

「それで、だ。最近の彼のことや、彼の周囲のことについて聞かせてほしいんだ。何でもいい、知ってることを全部」

「…ミス研の本気を出す時が来たって感じね」

「そう言うこと。僕は彼の友人だった（つもり）だし、決して彼を知らないわけじゃないが、決して全てを知ってるわけじゃないかな。知らぬことは人に聞こうってわけだ」

「なるほどな。まあ、最近のあいつのことでまず気になるのは、

…やっぱ八神と付き合いだしたことだろ」

「ああ。そうだな。あれは言わばかなりセンセーショナルな感じだった」

八神八吹。僕らの隣のクラスの女の子。かわいくて彼女を好きだと言う男は良くいるが、所謂真面目タイプで、今まで―少なくともこの学校入学以来は―誰かと付き合いあったって話はなかった。

それが突然、この前の夏休みが開けて見ると、市ヶ谷と付き合い合っていたんだ。

「あれは本当に意外だったよね。真面目な八吹ちゃんが付き合い始めたのもそうだし、その相手が市ヶ谷くんって…市ヶ谷くんにしても、あんな娘がタイプだなんてね。しかも、夏休み中だなんて、一体何がきっかけだったんだろ…」

実はこの件は一度ミス研の木曜日のテーマにもなりかけたが、僕

は友人の恋を詮索しなくなかったので、止めたのだった。

さらに三條烏丸が続ける。

「いや、そもそも、市ヶ谷が付き合うこと自体も結構珍しいんだ」
「そうだな。あいつ夜遊びさかんだっただけど、女は苦手だって言うていたし。恋愛にもそれほど興味ないヤツだったな」

八神か…彼女に市ヶ谷について聞くのはあまりにも忍びない。

…まあ僕が聞かなくても、なな美が詮索するだろうから、あいつにまかせるか。

「今考えると変わったヤツだったな。市ヶ谷って…」

「ああ、不良と内気な少年と真面目な高校生が全部混ざった感じ」
そう。彼は真面目でもあった。やるべき（と学校が定めた）勉強はきっちりやっていたし、成績も良かった。

むしろ成績が良くなかったら、彼にとってこの学校はもう少し居辛い場所になっていたことだろう。

この御時世になってもやっぱり、学校は頭のいいヤツに甘い。

「…そうだ、あとは…まあこれは今のほど珍しい話でもないけど、夏休み明け直前にあいつ、隣の学校の…なんていったかな…とにかく隣の学校のヤツと喧嘩したらしいぜ。」

それであいつ、夏休み明けはいきなり生徒指導室行きだったらしいな。

まあ、停学とかにはならなかったみたいだが…そうそう、その時に世界史の十之上が、やたらあいつの停学を主張してたらしい。

まあ妙っちゃ妙だな。普通そう言うのは生徒指導役の先生だろ？
まして、あの温厚な十之上だぜ？生徒指導役ですら停学はなしにしたみたいだつてのに…なんかあんまこの話知ってる人いないからよくわからないんだけどな。

まあ、実際あいつ停学になってなかったし。何とか丸くおさまったんだろ。いっつも何だかんだ停学にはならないけどな。とにかく、

なんで十之上なんかが今回に限って…」

そう言えば、新学期始まってからの市ヶ谷は、やたら十之上の愚痴を言っていたな。授業で先生が『怒れそうな』ヘマしたりする奴じゃないから、外見には解らなかったが…。

「まあ、先生との関係は…あんな奴だから決して良いとまではいえなかったが、意外と生徒指導役の新垣なんかとはうまくやってたみたいだったな」

「ああ、市ヶ谷くん、理系だからね。ほら、新垣先生は数学でしょ？だから妙に慕つてるとこあったよね」

…やっぱり話せば話すほど市ヶ谷ってヤツがわからなくなる。人物像が一つに定まらない感じ。

なんだろう。双子みたいな顔の同じ市ヶ谷が二人いて、代わり番に登校しているみたいだな…そんな感覚。…もちろん彼双子ではない。

麓郷屋、三條烏丸から聞いた話はだいたいこんな所だった。

なんだろうな。この、しっくりしない感じ。僕はあいつと結構仲良かった筈なんだがな…それにさっき聞いた話はどれも僕にとって全く奇異で初耳なニューズって訳でもなかったはずなのに。

改めて聞いてみると、本当、あいつは片方向からじゃ何もつかめないヤツだ。

今の話から疑いたくなる人々は、まずは八神八吹。二人の組み合わせはやっぱ不審だ。そして、そうなると八神を慕ってた男共も視野から外すべきではない。こっちは不特定多数に近いからもう少し絞り込みが必要かな。

教員については十之上、そして指導役の新垣か…。十之上は言うまでも無いし、逆にポジションの割に親しい新垣ってやつもうさん臭い。

あとは強いて言えばだが、外部であいつの喧嘩相手…名前くらいは知っとくべきかもな。

まだまだストーリーを組み立てるには不十分だな。とりあえず
入研室に戻ってなな美と話を噛み合わせてみるか。

市ヶ谷篇…完

第二話：虹宮殺人事件

セッション。

一人が向い合い。

構える。

木曜日の光景。

今日はいつにもまして本気だったけれど。

僕はまずなな美に先ほどの話をできるだけ、会話に沿って―下手な要約を加えようとせず、下手に感情を交えようとせずに―つぶさに話した。

「…なるほど。では、気になる点をピックアップする前に、私の話をしましょう」

「なな美は一体誰と話したんだ？」 彼女はふふつ、と笑い、

「市ヶ谷大月。彼の妹さんです」

「…おまえ…」

妹に伝えたのかよ…あの惨状を…そりゃあ確かに家族だから間も無く知らされるけどよ…。

「…ご心配なく。その事実には彼女に伝えていません」

「…そうか」

良かった…のかはわからないが。

「下手に身構えられるのもあれだったので…それで、私の質問はまず、兄がこのように消息を絶つのはよくあるのか、という所から始めました。」

これに対しては『一泊くらい勝手に外で泊まって来ることは珍しくはないかな。でも一日連続で、しかも学校を休んでるのはあまりなかったかな…』と答えました。

次に、心配じゃ無いんですかと、聞いた所、

『別に。あたしの家は割と自由奔放で通ってるしね。特に気にはならないな。あまり仲がいい訳でもないし。あ、特に何かあったわ

けでもないけどね。この年になれば、異性の兄妹だし、多少距離はあくよね』と、素っ気ない返答がありました。

そして、兄さんになにか最近変わったことはなかったでしょうか、とお聞きすると、

『これと言っていないと思うけど…あ、そうだ、兄さん最近彼女ができたみたいね。なんて言ったっけ。あたしの友達と同じ茶道部の先パイだったかな。でも何だか付き合って早々うまく行ってない感じなんだよね。兄さんそう言うのあまりなかったしね。…そうそう、あと最近十之上先生と仲が悪いみたいなんだよね。なんでかな。兄さん、喧嘩っ早いから生徒指導役なんかとはうまくいかないのはわかるんだけど。十之上先生は指導役じゃないし、あの先生温厚で有名じゃない』

それだけですか？

『…そうだな…そんな所かな。ま、早い話が大きくなることはないってことね』

まず気になる点。

「…八神って…部活に入っていないんじゃないかな。そんな暇あるなら勉強するようなタイプだしよ」

「でも、お相手は八神さんで間違いないですよね」

「…ああ、僕や麓郷屋たちの聞いた限りではね。実際一人にいるところも何度かみてるしな…」

「では、『茶道部の女の子』とは誰なんでしょう」

わからない。市ヶ谷大月が忘れている以上。

「それからあとは十之上のことだな」

「はい、妹さんは先日喧嘩のことは特に気にしている風でもなかったのにそちらの先生との関係は、やはり、市ヶ谷くんから聞いていたようですね」

「喧嘩の話とは別に何か確執の理由がありそうだ」

「ただ逆に、喧嘩のことを妹さんが全く話に出さなかったのは多

少気になりますね。そう言うことはよくあつたとは言え、やはり、ああいう風に聞いたならば、話の端くらいには出しそうなものが……」

「そういえば、喧嘩の話はおれも聞いたことなつたかな……最近指導室にあいつが行つていたのと、十之上のことなんかは聞いた気がしたけど」

そう、喧嘩のことを知っている人は、確かにあまりいないんだ。まあ妹さんが本当に知らなかったのか、興味がないのかは微妙なところだけど。

「それに、あいつ喧嘩したにしては、最近ケガとか全然してなかったな。体育なんかで着替える時も、目立つた痣なんか見覚えなし……」

十之上との関係。

八神との恋愛。

茶道部の女の子。

喧嘩の話。……とりあえず気になるはこんなところか。

まだ事件の真相は遠そうだ……。

「ところで、虹宮は？」

「そういえば、ここに戻る途中トイレに寄ると言つて別れたつきりですね。よほど切羽詰まっていたみたいで、旧館のトイレに入っていましたよ」

……それにしても、遅いですね……。なな美は時計を見て言った。

時計塔は時を止めている。市ヶ谷はもうあの狭い歯車のなかから出してもらえただろうか。

彼を出す作業をする間は、当然時計は止められるだろうが、彼が出された後も、しばらくは止められたままなのだろうか。

その時、虹宮が部屋に入つて来た。
見るからに様子がおかしかった。

顔は青ざめて、軀はがたと震えていた。

しばらくの間冷蔵庫で冷やされて、今出て来って感じた。

「ん？ どうした？」

返事がない。いや、返事をしようとしているが、うまく伝えられない…そんな様子だ。

元来言語障害を持つ虹宮。不安定な状況下に置かれると、一層言葉を発するのが困難になる。

震えている。

恐れているように。飲み込めない状況を恐れている。

そんな感覚。

現実が現実感を失う。

真実が事実を否定する。

事実が真実を裏切る。

彼女がやつと発した言葉は…

「旧館…トイレ…」

その後虹宮が一寸前の光景を思い出し取り乱し混乱し泣きわめき崩れ落ち、我が妹を失ったことを否定し拒絶しながら恐れおののき取り乱し混乱し泣きわめき崩れ落ちたことは言うまでもなく。

なな美は相変わらず冷静ながら、珍しく優しく虹宮を落ち着かせた。

その間に、僕が件のトイレへ向かう。

事態は非常に簡単だ。ただ非現実的で、悲劇的、悲慘的なだけ—
女子トイレに入るとすぐ。

目の前に、一人の少女がぶらさがっていた。

首に縄がかかっていた。

地に足がついていなかった。

一人の少女が死んでいた。

虹宮星見が死んでいた。

遺体は先ほどの市ヶ谷のそれに比べれば、人の形を保っていた。だからこそその顔を見て取ることが出来たのが逆に辛い。

そこには双子の姉虹宮星沖とまさに影魘つの青ざめた顔があつた。自分と同じ顔の死体を見るのは如何なものなのだろうと、わかりもしないのに星沖の気持ちを想像した。

事態は非常に面倒だ。ただ、一人の人間が同日の内に死が確認されただけ。

僕が死体を発見した後二時間後。

僕となな美はエクセルで飲み物を頼んだ。

勿論それを飲む気にはならず、ただ話す場所を確保すべく頼んだのだ。

因みに星沖は既に帰している。星見を看取りに来た親と共に。

「このように、捜査中に新たな事件が起こる場合、その為に話が振り出しに戻る場合と、かえって手掛かりが増える場合があります」

「まだ、そのいずれになるかはわからないが、虹宮星見と市ヶ谷の関係性は非常に稀薄だと言うことは今のところ間違いなさそうだ。学年もクラスも性別も性格も生活も部活も違えば、接点もかなり薄い。もちろん同じ学校だから皆無ではないが。せいぜい市ヶ谷大月が星見と知り合いっただけだ。それだって別に仲がよかったんじゃない、ただ同じ学年だから知っていた、と言うだけのことだ」

「つまり、一人に何らかの共通項があり、それに関して怨みを持つ者が犯人…とはいかない訳ですね」

「…いまのところはな。そもそもこの一つ、確かに近い時期の事件だが、所謂連続殺人って言うヤツなのかどうかもまだわからない」

本当に共通項は『時期』だけの可能性があるんだ。

「とりあえず、一つを完全に分けて考えて見てはどうだろう。その方が、本当に一つの事件に関連がないなら、話は進めやすいし、あるにしても、その内何らかの共通項が浮き出て来るはずだ」

「まあ、何にしても、まだ情報が少な過ぎますね。この件は来週までの宿題にしましょう。それまでにお互い聞き込みをして、また木曜日にミーティングをしましょう。さて、もう時間も遅いですし、今日は解散です」

次の日から数日間、学校は休みになる。

そういえばこういうときには学校が休みになることは何となく考えに入ってた。

その間に、市ヶ谷、虹宮星見両者の葬儀はしめやかに営まれた。

結局学校は翌週水曜日から始まることになるわけだ。その間にも僕ら（星沖はむりもないことながらショックから立ち直れず、事実上僕となな美の一人）は、捜査を続けた。その間僕ら（ミーティングがまだなのでなな美の方はわからないが）はそれぞれ収穫を得ていた。しかし、情報を掴めば掴むに従い、事件の奇妙さが浮き彫りになっていくのだった。

まず、市ヶ谷の方だが、どうも八神との関係は『普通の恋人』ではない感じだったらしい。

この件については僕も生前の市ヶ谷からあまり多くを聞いた訳ではなく、せいぜい時々一人きりで会っているくらいのことしか解らなかった。しかし、八神のクラスメートの話に拠ると、一人の会話は恋人と言うよりは、契約関係、或いは主従関係に近いような、そんな様子だったらしい。実際保健室（当学校は保健室の先生がしばしば留守にする為、保健室は格好のサボリプレイスなのだが）で

一人は何か金銭絡みの話をしていたと言うのだ。

しかも驚くことに、金を巻き上げていたのは八神の方らしかったとのこと。そもそも八神が授業をサボること自体意外だったが、クラスメートに拠ると、彼女は体が弱いので、しばしば保健室に行っていたようなのだ。

先生方は当然何度も彼女が保健室に行くことを知っていたが、優等生の八神のことだから、まさかサボリではないだろうと、彼女の体調不良というすっかり信じていたのだ。

ただし、保健室で二人がサボって会ったのは一回か、せいぜい数回のことだろう。

八神は確かに時々保健室に行くからと行って怪しまれはしないが、プラスで市ヶ谷が同時刻に何度も保健室に行っていたとしたら、それはさすがに怪しまれるに決まっている。そもそも市ヶ谷が授業を抜ければかなりの確率でサボりだと思われるのだから。

実際、八神が保健室に行った日時を分かる限りで調べた所、その時市ヶ谷もクラスにいなかったのは、その噂される一回…正確に言う、九月五日の限だけだった。この日、確か市ヶ谷は遅刻して二限から来たことになっていた。となると、ここで少し気になるのは、市ヶ谷と会った時以外、八神は授業を抜けて何をしていたのか…と言う話だ。

実際に体調が悪いと言う可能性も現時点で捨て切れないが…一回が実は逢引（という表現が適切かはさておき）ならば、その他も単なる体調不良ではない可能性は当然、出て来るってわけだ。

さて、さらに謎なのは十之上の方だ。

十之上が市ヶ谷を気嫌いしているのは、やはり単なる印象や、噂ではなく、本当のことのようで、先生の間でも有名なことなんだそう。

これが本当に『気』嫌いなのか、具体的な原因があるのかは今の

ところ不明だが、先生方は少なくとも思い当たる節はないと言っていた。

更にわからないのは生徒指導の先生の話。丁度先日喧嘩の件に十之上はやたらと市ヶ谷にキツくあたっていて、停学を主張していたので、一度生徒指導役と話し合いを持ったらしいのだが、その時、十之上は確かに市ヶ谷を嫌っていたのだが、ただ嫌っていたと言っよりは…。

恐れていた。

…そう言う印象を受けたとのこと。

また、その嫌い方はあまりにも執拗で、生徒指導役が、生徒を穿った見方で判断すべきではないと諭したほどらしい。

先ほども言ったように、この十之上の感情に何か具体的な根拠があるのかは今のところ不明だ。

さて、人間関係はこんなところだ。

あとは市ヶ谷の死亡推定時刻ってやつだけど、水曜日の一限の後半、十時頃に先生が彼を見たとのこと。彼が鹵車に押し込められたのは12時頃だから、死んだのはこの間と見て良さそうだ。

先生は、市ヶ谷になぜ教室をぬけたのか聞いた所、彼は保健室に行くと言って、保健室へ向かって行ったらしい。（その日は教室を訪れていないので、実際は登校して真っ直ぐ保健室に向かったようだ）

どうも保健室と云うのはこの事件に置いて何か重要な鍵になりそうだ。

市ヶ谷関連では次に話を聞くのは保健室の先生になるかもしれない。ミーティングの後に判断することではあるが。

さてと、次は虹宮星見の方に焦点を当てて話を聞きに行くとするか。

まだ親しい人物には話を聞いていないが、星見はなかなか評判の

良い人物で、同学年の間では交流も広いとのことだ。市ヶ谷と比べれると、なかなか殺された理由は見えにくく、『なんであんな子が…』的なショックを受けている人間も少なくないみたいだ。

まあ、被害者が星見でなくとも、殺されて当然の人間なんて、存在しないのだけだ。

始めは星見のクラスメートだ。星見はクラスでも人気者だったようなので、クラスメートは皆ある程度関係者なのだが、まずその中からとくに仲の良い2人から話を聞いた。

ちなみにここ、学校近くのスタバ。

「では、軽く自己紹介を。僕の名前は四恩寺朝顔。ご存じの通りブラウシュテヘン大附のミス研に所属しています」

ミス研の名を出して置けば、僕の紹介はこれで充分だ。

続いて、一人が挨拶する。僕から見て左側の子。カフェ「モカ」にクリームをトッピングする意味はよくわからない。髪は背中まであるロングで、緩めのウェーブ。髪の色は明るい茶。

ちなみに服装は学校帰りの為全員制服だ。

「ええと、楠久須美と言います。バレー部で、部は違っけれど星見とは小さい時から友達でした」

次、もう片方の女の子。髪はショートでうさぎの髪留めをしている。「はい。栗原千…です。星見とは…高校からで付き合いは浅いですが…仲良かったです…」

彼女は明らかに話すのが苦手そうだ。

「あ、あたしと千は母親が知り合い同士だったから、学校は違っただけで友達だったんだ。そんで、高校入って星見とも仲良くなったわけ。まあ、よく三人でつるんでいたんだよね」

と、となりから久須美がつけたす。

さて、早速本題に入るとするか。

「わかりだとは思いますが、僕らミス研は虹宮星見さんが亡くなった事件について調べています。お一人に聞きたいのは虹宮さんの最近のことなんです。なにか彼女に変わったことはなかったでしょうか」

僕の質問に楠が質問で返す。

「あの、星見はやっぱり、誰かに殺されたのでしょうか」

その質問には、彼女が殺されたと言う捜査結果を疑う気持ちが含まれていた。

「…まだ100%とはいいきれません。さすがに事故ではありえないでしょうが、自殺の可能性はゼロではないでしょう。ただ、一方でやはり殺された可能性が濃厚、と見られているようです」

…その言葉は楠に改めてショックを与えるものだった。

「…なんでだろうな…あんないい子が…何の怨みで…」

捜査をする上で辛いのはやっぱりこの瞬間だ。

遺った者の絶望を見る時。

やりきれなさを感じる時。

僕は声をかけようとする。

実際に言葉を発してみる。

僕の言葉なんかムダだと知りながら。

「…もちろんいまとなってはわからないことですが…」

終わってしまった今となっては。

「ですが、虹宮の非によって、彼女が恨まれたとは限らない…」

彼女は本当に誰からも恨まれないような女の子で、誰からも恨まれないよう生きていたかもしれない…」

「…でも、実際に星見は死んだ」

「そう。実際に、恐らくは殺された。何らかの兇悪によって。

ここで世の中の理不尽を説くつもりはありませんが、世の中には恨む故の亡い怨みを抱き、それに駆られて兇動を起こす輩もいるということです。」

…少なくともいまはそう思ふべきでしょう。彼女は非などなく、
全くの理不尽な兇動が彼女を悲運にも襲ってしまった。
何の救いもありませんが、そう思って、そう考えて、そう信じて
おくべきでしょう。特に友人のあなたはね」
密やかに穏やかに、彼女は涙を流した。

しばらく後に口を開いたのは、意外にも隣にいた栗原だった。

「…一つだけ、『理不尽』に心当たりが…ある」

控え目に、躊躇気味に、戸惑い気味に口を開く。

「詳しく聞いてもいいですか？」

「…十之上先生…の事…」

またか。また十之上か。

「…言ってもいいのかな…」

栗原は楠に尋ねる。

「…正確な事…私知らないし…やっぱ星見に悪い…かな…」

楠も、十之上と言う名前を聞いただけで、栗原が躊躇している内
容に心当たりはあるようだ。

「…二人共に知っている話なんですか？ 十之上と虹宮が何か関
係でも？」

二人ともかなり戸惑っていたが、楠が、決心したように、話始め
た。

「つい最近のことなんだけど…、十之上が星見に、やたら親しく
接してくるなって思ってた…」

「…それはセクハラってやつですか？」

「…そうなるかな。最初はちょっと制服姿かわいい、とか何とか
言われるだけだったらしいんだけど、少しずつエスカレートしてた
みたいで…体に触ったりもするようになって…」

でも、更に奇妙なのは、星見本人があんまり気にしてないみたい
だったことなんですよ」

「十之上に…職員室…呼ばれたりもしてた…」

「そう。何やかや用事作ってね」

…なるほど。訴えれば勝てそうな感じのセクハラだ。もちろん星見にその意志がないなら別だが。

「それだけなら…いやそれだけってのもちよつと失礼な話だけだね、でも、それだけならただのセクハラ疑惑なんだけど、奇妙なのはその後なんだよ」

…あれは一週間前だったかな…と彼女は続ける。

「その日も何だか十之上に放課後呼ばれたみたいで、それでちよつとやりすぎだろってことで、一緒に帰るついで私と栗原が待つて、あまり酷いようなら、何かしらの行動に出ようと思ったのよ。」

他の先生に相談するとか…職員室乗り込むとかね。実際には何もしなかったんだけど。

何故かって？ その日星見、すぐ戻ってきたのよ。職員室…というか十之上のいた場所からね。それで、帰ろうって私たちを促すの…でも、彼女に『何か』あったんじゃないかって。もちろん十之上とね、何かあったんじゃないかって、その時感じたの。

いや、具体的にはわからないし、思い過ごしかもしれないんだけどね。とにかく、何か感覚的に何かあった気がしたの。

でも、彼女に聞いても、『何でもない。今日はプリント届けただけ』って言うの。

ドラマやら小説とかならね。こういうとき、『明らかに彼女の顔色や拳動がおかしかった…』なんてなるのかも知れないけど、実際はそんな目に見える変化なんてなくて…普通って言えば言える感じでも、やっぱり何か、胸騒ぎって言うの？ そう言う変な不安みたいのがよぎったのよ。

だから私、結構しつこく星見に聞いたんだけどね、何でもないって言うだけだから。…腑に落ちなかったけど、一旦は、まあ何でもなかったんだろって思うことにしたの。

でもやっぱり、今考えるとちよつと妙な感じがするんだよね。あ

のとき十之上と何かあったか、何か言われたかしたんじゃないかって気が、ね」

「なるほど。確かに気にならないと言えば嘘ですね」

「…十之上つて、一年生の受け持ち多かったから、よく噂にのぼるけど、あんまいい話聞かないよね」

「へえ、例えば？」

僕ら二年の間では彼はそれ程話題にのぼるような人ではなかった。なぜなら彼は、二年では僕らのクラスの生物を週一時限受け持っているだけだからだ。二年は10クラスあるから、実に9割の二年生は、彼と現在交流がないのだ。

僕らのクラスの間でも、温厚だというイメージがある程度だろう。少し事情通な僕でも、それプラス、市ヶ谷を嫌っている、というイメージがある程度だ。

「…まずセクハラのことだけどね、別に星見だけが悩んでた訳じゃなくて、そう言う話は彼女以外にも結構している人いたみたい。だから十之上を気味悪がっている人は結構多かったな。」

他にも、色々あったな、学校のお金使うこんでるとか、生徒の弱み握って脅迫してるとか、あ、でも逆に貢いでるみたいな話もあったつけ。

まあ、噂だからね。どこまでが本当かはよくわからないけど」

「…逆に、全てが嘘とも限りませんよ」

「そう、そう言うこと」

教員、十之上…これだけ話に出て来るんだから、調べてみないわけにはいかないだろう。僕には彼が、10年間放置されたざぶとんのように思えて来た。

「…本当に、星見、かわいそう…決して幸せじゃなかった筈なのに、性格は本当に良い子で…」 「…幸せじゃなかった？」

「あれ、星冲さんとは同じ部なんだから知ってますよね。あの二人、今お父さんいないんだって」

え？ 完全に初耳だった。

「…星冲はあまり、いや、全く自分の話しないからな…」

「…そうか…そうだよな…」とにかくね、何かお父さん二人が産まれる前に離婚届置いて失踪したらしくてね、お母さんだけで二人を育てたんだって。

それに星冲さんの方は…こういう言い方は良くないけど、病院と行かなきゃだから、より一層大変だったんじゃないかな。お母さんも、星見も、もちろん星冲さんもね」

…そうだったんだ…。知らなかった。

僕は感情の振れ幅の小ささには自信があるが、この時ばかりは胸が締め付けられるような想いつて言う奴にかられた。

星見は何を抱いて、何を思ってたんだろう？

星冲は遺されて今何を思っているのだろう？

しかし、刹那に冷静を取り戻そうとする。

そうしなければ、現実を知ることが出来なくなるからだ。

常に冷静沈着なれ。 「…そうですか。知りませんでした…」

僕は、冷静だろうか。

「…お話は以上ですか」

「…そうだね。やっぱり彼女のことって言うときくらいかな」

「…本当に、良い子だから…」

栗原が最後に言った。

人が二人ばかり殺されたところで世界には毛程の変化もなかった。事件が起きたこの学校ですら、昨日、つまり水曜日から学校から始まって。 木曜日の今日にはもう、普通どおりに退屈な授業が展

開されている。

それにしても、テレビの取材なんか来て騒ぎになると思ったんだけどな…それもないだなんてな…ま、余計に五月蠅くならなくて良いけど。

僕はお経よりも退屈な授業をこなし、放課後ミス研究室へ行く。

入るなり、正面にはなな美がいた。

「こんにちは。今日は占いの日ですが、ミーティングをすることにしましょう」

「そうだな。ちょっと行き詰まってる感じだし、話を整理して二人で考えてみよう」

「…予想通り、捜査は難航を極めていますね」

「…ああ、お互い、な」

そう、捜査は非常に非常に難航している。

原因は二つ。

一つは目撃者が稀薄ゆえ、肝心の事件前後の様子がつかめないこと。

学校とは誠に奇妙な場所で、千人以上が一つの建物にいるというのに、授業時間中の教室外での出来事を目撃している人間は滅多にいないのだ。

市ヶ谷は、水曜日の午前中に殺され、その後十二時十分に歯車に押し込められたらしい、ということ。

最後の目撃者は彼が保健室に向かう所を見ているが、本当に保健室に行ったかは不明。仮に保健室に行ったのだとして、保健室に何があったのかも不明。

以上が一人で得た市ヶ谷についての当日の情報だ。

ただ、十二時十分に本当に犯行が行われたなら、生徒のほとんどは犯行不可能だ。もちろんみんな授業中だからな。

何らかの方法で授業を抜けられれば可能だ。例えば保健室に行くと言ったりして。

…ただ、そんなことをしたら、あとで真っ先に疑われるのは目に見えている。わざわざそこまでしたこの時間帯に犯行に及ぶメリットはあるだろうか…。

やはり生徒の犯行とは考えにくい。

ならば教員だろうか。教員も授業を受け持っていれば犯行は難しいが、授業を受け持っていない教員なら犯行は充分可能だろう。

「…虹宮星見の方は、その後どうだった？」

「…そうですね、先週時点では、水曜日の放課後に星沖が会いに行ったものの、いなくて、その後不明ということになってしまいましたね。市ヶ谷さんと違って、星見さんが夜間外出することは滅多になかったので、お母さんも星沖もかなり心配したようです。しかし、その晩彼女は帰って来ず、一切目撃されないうまま、星沖がトイレで発見するに至っています」

旧館のトイレって言うのは、千人以上出入りする建物の一部でありながら、一日以上人が出入りしない場所なのだ。星沖がたまたま利用したのだから奇跡みたいなものだ。

…やっぱり双子だから何かつながるものがあつたのだろうか。

ちなみに彼女は今日さすがに学校を休んだ。学校は通常どおりでも、彼女はそうはいかなかったのだ。

…恐らくは彼女と虹宮星見の母親も…。

「その水曜はどうだ？ 同じクラスの奴なら授業終わった時行き先位聞いている奴いるんじゃないかな？ …と言っても、僕が会った人達は知らなかったようだ。」

あれから僕は、楠、栗原含めクラスメート7人に話を聞いたが、あれ以上の収穫は正直なかった。

「私の方でも特にありませんでしたね。ホームルームが終わるやいなや、すぐ教室を出て行ったようです。不運なことに、あの日彼女のクラスはホームルームが早めに終わっただけで、他クラスはま

だホームルーム中だった為に、その後の目撃者がおらず、どこへ消えたかも謎のままなんです」

「殺されたのは水曜中ではあるみたいだがな…午後九時頃、遅くて十時、とのことだ」

「…九時ですか？」

「ああ…九時って学校開いてんのかな」

「…いえ、今は部活もそれほど熱い時期ではなく、先生方もその日は比較的早く上がったようで、八時には学校は無人になっていたとのことですよ」

「でも、学校って夜間完全に誰も入らないのか？」

「入口にいる管理人さんは夜間もおられるようですが、校内は施錠してしまうみたいですね。あ、鍵は管理人さんの詰め所に保管されるみたいです。その日も、黒猫先生が最後に、管理人さんに鍵を渡していったそうです。八時頃にね」

つまり、八時に殺された筈なのに、八時に犯行は不可能、と。

「…まさか管理人が犯人で訳でもないだろうにな」

「…誰かと接点があって実は犯人…なんて面白そうですが、残念ながらそんな話は今のところ全くないですね」

「じゃあ、所謂一つの…」

「密室って言うやつですね。『室』と言うのにはあまりにも大きいですが」

学校全体が密室…。

「ちなみに窓などもきっちり施錠されていたみたいです。茶道部に、きっちりしていないと許せない子がいるらしく、当日もきっちり施錠されているのを確認してから帰ったとのこと。ちなみにその子、いつも施錠を確認して帰るのが趣味のようで、毎日帰るのは最後になる校長先生が帰る直前らしいです」

「…変わった子だな」

「ただ、茶道部は活動日は、部員が女ばかりということもあって、施錠直前までだべっていることが常だそうで、学校に遅くまで残っていること自体はそれほど奇異なことではないようです。」

よかった。施錠の為にだけに遅くまで残るような子だったらどうしようかと思っただじゃないか。

「あと、窓が破壊された形跡もないみたいです。…つまり、夜に外部から誰かが侵入したとは考えられないわけですね」

となると死亡時刻を信じるなら、マジで容疑者は管理人さんってことになる。でも、関係ないだろうなきつと。…疑ってごめん、管理人さん。

「管理人さんが犯人でないとしたら、何らかのトリックってことになるですね」

「…そうだな。数世紀に渡ってブームになっていると言っても過言ではない密室殺人ってことになるな」

「自殺の可能性も低いながらありますがね」

「ああ。ただ、僕が見た時は、首を吊るのに必要な足場みたいなものがなかったからな。自分で自分の首吊るにしても何らかの凝った方法がいりそうだな。あれは」

「自殺の為にトリックですか…それはそれで奇妙」

「ま、奇妙って言えば、一両日中に一人の変死者が出たこと自体奇妙だけだな」

「それは奇妙な話ですね」

「そうだな。非常に。非常に」

非常に。

「可能性としてはやっぱり時間差トリックだと思うんだよな」

「…という？」

「…つまりだ、死亡時刻が九時ってことは、言ってしまうえば、『首が締まり始める時間』が九時頃ってことだ。だから、何らかの方法で施錠前に首に輪をかけておいて、しばらくしたら締まるみたい

な方法を使えばいいわけだ」

「…なるほど。具体的にその方法とは？」

「…いや、まだそこまでは」

…とは言ったものの、この時僕にもなな美にも、そして、この文章を読んでいる方々も、或いは『とり得る手段』を思いついていたのだろう。むしろ、『思い付く手段』が多過ぎて、実際どれが使われたまだわからないって言う段階かもしれないくらいのものだ。

…だが、具体的な方法を今考えるのはまだ早いと思ったんだ。そっちの捜査はまだあまり進めてないからね。下手に先回って勘ぐると、ステレオタイプやプレジャデイスが推理の邪魔をするってわけだ。（調子にのって英語を使ってみたが、果たして場面に合っているのだろうか。そもそも *prejudice* ってカタカナでかいたらこれでいいのか？）

「さて、次に考えるのは人物関係ですね。私はあのあと、再度大月さんに話を聞くことが出来ました。『よく肉親に死んだばかりの兄について聞き回る事が出来たな、いい神経してやがる』って言われる前に一応言っておきますが、大月さんから、あの後気になったことが一つ出来たと、言って来たんですよ」

相変わらず穿った考えを僕にぶつけながら話す女だ。『いい神経してやがる』なんて今更言う話でもないだろうが。

「彼女に聞いた話をなるだけそのまま再現しますと、『まずは思い出したことから言う』とね、一度だけ、お兄ちゃん彼女とは別の女の子のこと私に話しかけたときがあったの。」

話かけてやめた というのがこの場合ポイントなんだけど、夏休み始め頃だったかな、いつか正確には覚えてないんだけど晩ご飯の時にね、お盆の休み使って家族旅行しよう、みたいな話をしたんだよ。

うちそう言うこと今迄あまりなかったから、その話がでたのはよく覚えていたの。 だけどお兄ちゃんがたぶんお盆は無理って言うの。『何で？』ってあたしが聞いたんだよ。 あ、その時はお兄ちゃ

んに彼女いることまだ知らなかったから、本当にお盆がダメな理由
知らなかったし、思い当たらなかったのね。

でも、お兄ちゃんその時『八神って友達と会う』みたいのと言
ってたのよ。

その時、なんか怪しいな、本当に普通の友達かなってあたし思っ
たんだ。

それで、そのあときいてみたら、案の定その後、彼女が出来たっ
て話になったじゃない。だから、『ああ、ヤガミって本当は彼女だ
ったんだな』って思ったのね。

これは間違いない？』

そう聞いてきたので、私はとりあえずうなづきました。彼の彼女
についてはどこかで勘違いがありそうだと言うのは前言いましたが、
ここでは敢えて流しました。それを言うことで大月さんが話す内容
を変えるのを防ぐためです」

そうだ。基本的に市ヶ谷の彼女は八神矢吹と言う認識を僕を始め
多くの同級生は持っているが、大月は『お兄ちゃんの彼女は茶道部』
と、この前話したのだ。

ちなみにあの後確認した所、やはり八神は茶道部に所属していな
かった。

「で続きは？」

「はい。そのあと大月さんはこう続けます。

『それでね、あたし前あなたに会った時はそのヤガミって名前忘
れてたでしょ？ あのすぐ後思い出してね。ああ、言えばよかった
なって思ってたの。何しろ、その後あまりお兄ちゃんとその子の話
しなかったから…前も言ったけれど、あたしとお兄ちゃん、普段か
らよく話すってわけじゃなかったからね。とにかく、茶道部のヤ
ガミって子がお兄ちゃんの彼女だったんだって、あのあと思い出し
たのね。』

だけど、あたしのなかで解らなくなっただのは葬式の時。

彼女だったら、付き合ってたんだし、当然通夜位には来ると思っ

てたの。

別に密葬ってわけじゃなくて、高校の友達もクラスの人なんかも来てみたいだから、来づらいつてわけじゃな全くなかったしね。

…だけど、ヤガミなんて人は来なかったのよ。

それで気になって、ヤガミって人は茶道部じゃないの？　って、あたしの友達に聞いたんだけど、違うって言うの。

確かに茶道部だってお兄ちゃん言ってた気がしたんだけどな…」

…うーん、どうも妙な話だ。

なぜ僕らの内と妹で情報が食い違っているんだ。

「大月がまさか、帰宅部の奴を茶道部と勘違いしてるなんてことは…ないよな…。」

まさか、二股？」

そんなやつに見えなかつたけどな…。

「もう一つの可能性は、私たちが勘違いしている…」

「まさか、だって八神が彼女だと思ってる奴は大勢いるし、第一僕なんかは市ヶ谷から直接聞いているわけだし…」　「確かにそ

うですが、可能性がないわけではないですし、それを言うなら、大月さんだつて直接市ヶ谷くんから聞いているって言いますよ」

確かにそうだ。

可能性だけで言えば、僕らが間違っている可能性と、大月が間違っている可能性は同じくらいだ。

「この結論はもう少し情報をつかまないとでないでしょう。現時点では保留というか、引き続き調べて行きましょう」

「それじゃ次だ。僕としては、どうしても突っ込んで調べてみたい人物が浮かんだんだが」

「誰ですか」

「教師、十之上雁湯史だ。最初は市ヶ谷とやたら仲が悪かったっただけだったんだが、どうも星見ともいろいろあったらしい」

「…偶然ですね。私も彼についてかなり気になる話を聞いたんで

すよ」

「というと？」

「校外でのこと何ですけどね、八神さんと十之上先生が会っているのを見たという人がいるんですよ。それも『一つの印象として』、非常に親密だったと」

十之上と八神が…？

「それと、こちらは一つの客観的事実ですが、ちょっと調べてみると、八神さんが保健室に行った時の内、少なくとも二回は、十之上先生は授業がありませんでした。彼女が今学期保健室に行った回数はおわっているだけで五回。内一回は市ヶ谷くんと会っている可能性が高く残り四回の内二回は、もしかすると…」

十之上に会っていた可能性があるって訳か。

「と、ここまででこの後調べるべきは…」

- ・ 市ヶ谷の本当の彼女はどっちなのか
- ・ 大月さんの言う茶道部の子は誰なのか
- ・ 密室のトリック
- ・ 八神と十之上先生について
- ・ 保健室で何があったのか

最後のがわかると話はずななんです、目撃者が皆無なので、なかなか難しいでしょうね」

保健室の先生がきちんといてくれれば話は解決だと言うのに。なんてことだ。

「よし、まだわからないことは多いが、調べることは具体化してきましたし、ここからは情報は量より質だろう。どうだ？ここからは一人一緒に行動しないか？」

「そうですね、この先多過ぎる情報と判断は捜査の方向性をぼかしかねませんからね。」

十之上先生に行く前に今、この時間は珍しい人がいらっしやいます」

「え、誰？」

「保健室の先生ですよ。やはり、今回は保健室で重要なやりとりがあつたみたいですし、彼女の話は聞いておいてもいいでしょう?」
なんと今日は保健室の先生がいます。

そりゃあ行かない手はないよな。

僕らはやつと腰をあげ、ミス研室を出て行く。

三：八神矢吹殺人事件

彼女がエリートだと言う噂は本当だったらしい。

彼女の実家は都内で大きな病院を経営していて、父親はその医院長。母親もその医者。

そんな医者家庭に生まれた彼女だが、彼女自身も遺伝なのかはわからないが、極限なる秀才。塾や家庭教師等にお世話になることなく、東大の理科三類に現役で合格した。

そのまま医学部に進級していくわけだが、本人は特に医者になりたいわけではなかったという。

大学の実習で人を見るのが嫌になり、彼女は一応医師試験をパスしたものの、そのまま医師への道から外れた。

それから数年、その彼女は今の学校の保健室の先生だ。

ただ、保健室の匂いが嫌だということで、普段から職員室にいたり、放課後なら教室で何人かの生徒に勉強を教えたり、そもそも学校に来なかったり（僕らミス研によれば、彼女が来る日は5日のうち2日程）なので、保健室で会えることは稀だ。保健室外でもけしよく見かける存在ではない。

彼女の名は三木多爾海寝子。その彼女が今保健室にいるというのだ。

しかしそんな情報までいち早く掴むとは。流石なな美（本名七奈美。そろそろみんな忘れてるだろうからここで敢えて言っておく）だ。

と、言うわけで、僕らは保健室のまえにたどり着いた。

ノックは敢えてせず、なな美はドアを開けた。

中には白衣を着た女……つまり三木多爾先生がいる。

白衣はまあ普通なのだが、その中にきている上下真っ赤な服が気にならない人はそんなに多くないだろう。

同時に、その端正な顔立ちとご立派な女性らしい体つきが全く気

にならない男もそう多くないだろう。天は彼女にあまりにも多くのものを与えたようだ。まずいのはそのマイペースな性格くらいか。

「こんにちは。海ね先生。珍しいですね保健室にいるだなんて」

「あ、まだクビになってなかったんだ。良かった良かった」

なな美と僕は丁重に挨拶を投げつけた。

「んー、あーなんか今日は来たほうがいいと思ってさー。そして暗の上だよ。何なんだよこの冷凍室」

冷凍室？

ちなみに保健室には冷蔵庫が置いてある。氷とか常温保存できない医薬品なんかを保管するためだ。

「冷凍室がどうかしたんですか」

「どうもこうもどうもかふも、あたしが保管しておいた冷却剤とか氷枕とか氷とか、アイスクリームとか冷凍みかん用みかんとかがごっそり寝子削ぎ亡くなっているんだ！」

主に彼女を慌てさせている原因がみかんとアイスであることは云うまでもなく。

「せっかくハーゲン買ったのになー…ラムレーズン味。もう冷凍室空っぽだよ。二段にするための板まで無くなっちゃって」

「え？」

僕らは冷凍室をみせてもらった。

中は空っぽな伽藍堂であった。仕切りやら氷を作る皿やらも含め全てなくなり、そこには一辺50cmくらいの立方空間がいた。

「全く…なんだってこんなことを…」

「先生って一番最近来たのいつ？」

「えーと、事件の2日前かな」

…どんだけサボってたんだよ海ねさん。

つーかなんでクビにならないんだよ。

「ところで、八神さんはここによくいらっしゃいますか」

「んあ？ああ事件前に一回見たけどあたしはそんなときしか会っていないよ。ったく、八神ったら…ねえ。あんな顔して…」

海ね先生は変ににやけだした。気持ちよいか悪いかといえば明らかに悪い。

「どうかしたんですか。八神が」

「どうもこうもですよ。本当。このベッドはその為のベッドじゃないっての。ね？」

「ねえって云われても…」

まあ話は大体分かったが。

やっぱりそう言うことなのか。でも、あの八神がね…。

「お相手は誰でしたか」

なな美が躊躇することなく聞いた。

「いやあそれが流石に凝視するわけにもいなくてさ、すぐ保健室出たからわかんなかったよ。八神は上だったからすぐ分かったけどね」

意外に多い八神ファンが聞いたら卒倒しそうな話が続出だ。

てゆうか海ね先生は止める立場じゃないのかそれ。

「いやあ、授業抜け出して抜かせるなんて熱いねえ…本当高校生は困った困った。あはは」

あはは、じゃないって。

上手いこと云ったつもりか。

その他もいろいろ話たかったんだけど、海ね先生はその話しかしただがらないので、僕らは呆れてあきらめて保健室を出てきた。

しかし、彼女を訪ねた収穫は決して小さくなかった。

「八神はそう言うことの為に保健室へ行っていたのか…」

「表沙汰になったら男性陣のショックは相当ですね」

なな美は少し間をおいてさらに言葉を続ける。

「但し、もっと大事な情報がありましたね」

「そうだな。しかし、まさかそんな古典的なトリックをね…」

「そう。まさかですよ」

しかし、冷凍室がそんなに開いていたならば、やはり、そう言う

ことなんだろう。

「今日海ね先生が帰って来たのは犯人的には不運ってやつだったな」

「…というか、冷蔵庫くらいちゃんと元に戻しておきましょうよ」
「まあでも、アイスとか氷嚢類まで復元するのは無理だろうからな、どうせ戻せないなら放つとけてことだろ」

そう。僕は当然冷凍室を伽藍堂にしたのは犯人、特に虹宮を殺した犯人だと思っているわけだ。

犯人はどうしても冷凍室のサイズギリギリの容積の液体を凍らせる必要があつたんだ。

それを使って、例のトリックを使つたわけだ。

…些か古典的なのは否めないけどね。

「…やつぱり八神の話は聞きたいんだけどな…」

「今日お休みなさると思いませんでしたね…」

まあ、体があまり強くないってのはあながち嘘でもないらしい。その程度にしか考えないことにしておいた。

「じゃあ、八神ともう一人の重要参考人のところへ行きましょうか」

「…ああ。十之上のところに、な」

この時間帯、職員室は意外とまばらなものだ。

部活の顧問は部活に行っているし、それ以外にも個々の仕事があるのだろうか。

しかし幸いなことに、十之上は職員室の自分の席に座っていた。特にやることはないのだろうか。

「こんにちは。十之上先生」

「おお、四恩寺じゃないか、それに隣は…？」

「はじめまして。私はミス研チーフの七奈美といいます」

はじめましてって何だ。確かになな美は彼の授業を受けたことはないし、担任が彼だったこともないが、学校に一年半もいて、はじめましてって。

その点で言えば、十之上も十之上だ。この学校にいて、なな美を知らないはずないだろ。「今日はちょっとお聞きしたいことが御座いますって」

なな美は落ち着いた調子で言った。

「はは…いつもの捜査ってやつか、今回はミス研にとってもでかいヤマだろうがね。あれだろ？ 例の連続殺人を調べているんだろ？ 僕からは何もいい情報はでてこないと思うけどな」

明らかに慌てた調子の十之上。しっかりしろよ。

とは言ったものの、一体どこから切り込めばいいものか…怪しいトピックが多すぎてむしろわからん…。

ただ、なな美は大体攻め方を決めているようだった。

「今日、八神さんがお休みなんですが、何ででしょうね」

「そうだな。僕は主に一年生を受け持つことが多いから、八神のことはよく知らないが、体が弱いつて話じゃないか。普段からよく保健室に行くみたいだしな。まあ、あの保健室が機能しているかは微妙だが…八神と事件とは何か関係あるのか？」

「はい。彼女は市ヶ谷と付き合っていたみたいなんですね。やっぱり気になるんですよ」

「へえ、そうなのか。それは知らなかったな」

相変わらず十之上は落ち着きがない。次は僕が聞いてみる。

「そう言えば十之上先生、最近市ヶ谷にずいぶん厳しく当たっていたみたいですけど、あいつ、何かやったんですか」

「厳しく？ 僕が？」

「はい。教員の間でも評判になってますよ。何でもあいつが最近喧嘩したとき、しきりに停学を主張したとか…」

これはうそ、『教員の間』でも『生徒の間』でも、この噂は聞かれない。

「あ、ああ、あれ。なんだもう知っているのか。ならば仕方がない。あれは僕の認識不足でね、相手から手を出して来たこととかよく知らなかったんだよ。本当。彼は喧嘩っ早かったみたいだったからね。ついつい固定観念的に普通の喧嘩だと思ってしまった。教員の悪い癖だ。」

しかし、双方の話を聞いてみるとどうも市ヶ谷は限りなく正当防衛に近かったみたいだね。相手はナイフ持ってたみたいだし、喧嘩って言うより、相手の強盗を振り切るために応戦したって感じのようだ。これは相手の親族も認めていることだね」

なるほど、事態はただの喧嘩にはおさまらない話のようだ。

「へえ、誰と喧嘩したんですか。その話、生徒はあまり知らないみたいですけど」

「いや、このことは市ヶ谷の個人的なことだからね。あまり詳しく話すわけにはいかないんだよ」

「相手は納得したんですか。その緩い処分で」

「ああ。まあ納得したようだった。親族もあまり事を大きくしたくないみたいだったし、ナイフ持ってたとなると流石にどうしようもない話だろう」

「…それじゃ、市ヶ谷に厳しかったのは先生の誤解のせいだ？」

「ああ、彼にはすまなかったと誤りたかったんだが、その矢先だったよ。市ヶ谷があんな形で見つかったのは。一体誰があんなこと非道いを…」

彼は微妙に遠いところを見ながらそう語った。

「…本当に許せない話だよ。市ヶ谷は確かに乱暴なところもあったが、決して悪いヤツではないと思っていた…まして、まあ殺されるほど恨まれるヤツなんてまずいないけど、まさか市ヶ谷に限って…」

何だか大げさに十之上は怒っているように見えた。感情表現が豊か、といえはそう言うことなのだろうが。

「でも…」

なな美はもつたいぶりながら、或いはそういう印象をあたえようとしながら、切り出す。

「先生にとって辛いのは、むしろ、虹宮さんが殺されたこと、ですよね」

途端に十之上の動揺の色が濃くなる。

「な、どういう意味だ？」

ふふつ、となな美は続ける。

「一年生から聞きましたよ。随分星洋さんを気に入ってらっしゃったとか。何でも、何度も職員室に呼び出しては、話をしていたとか」

「……………」

十之上は返す言葉が見つからないようだった。

「こう言っでは何ですが、星洋さんに対しては単なる生徒以上の感情を抱いておりましたね？」

とどめに僕が尋ねた。

しばしの沈黙。

「……ああ、そうだ」

思ったよりもあっさりと認める十之上であった。

「…多少よろしくないレベルに仲が良かったと、一年生のクラスメートはみているようですよ…」 「ああ、確かに。そう言う風に見えないこともなかったかもな」

十之上はあくまでも無感情に言っていた。

「まあ、このことはここだけの話にしておきましょう。ところで、そんな十之上先生は、虹宮さんに恨みを抱く人間に心当たり、ないですか」

「…それが、全く心当たりがないんだ。彼女はあの通り明るいいい子だからな。そう言った人とのトラブルが起きるような子には、全く見えなかったよ… 本当に」

心底辛そうな素振りを見せる十之上。しかし、その言葉たちはどうも僕に響いてこない。

どうも眞実たちはまた別の所にいる気がする。僕らはそれとは違う何かを今みているようだった。

「随分と御鼻屑になっていらっしやったようですね」

「それはもう。こうなった今となっては仕方ないが…僕は本当にあの生徒のことが好きだったからな。本当に犯人を許せないよ。虹宮殺しの犯人だけはね」

僕らは表情を変えずに聞き流したが、十之上はもつと奥の、より眞実に近いことを知っているのは間違いないと感じた。

しかし、今日の所は、普通に質問した所で、その胸の内を教えるはくれないだろう。

僕らは職員室を出、再びミス研究室へ戻った。

空。

空。

青空。

ここは校舎で一番高い場所。

仰向けの躰から見えるのは。

空。

空。

青空。

青…。

「まず、気になったことがありました」

ミス研究室に着くやいなやなな美は話し出す。

「紛れもなく、市ヶ谷くんの喧嘩の件ですね。十之上先生の話を信じるならば、やはり、喧嘩は実際に起こったことなのでしょうね」

「ああ。十之上の話を信じるなら、な」

「三条鴉丸君も知っていたようですし、一応ここは本当にあつたと仮定したいと思います。」

そうなると気になるのは、この事実を知らない、或いは知らないと言つ人の多さです。この原因は市ヶ谷君が周りに云わなかったことにあると思います。なぜなら、どうせ先生方は積極的にある生徒がなぜ説教されているかを周りに話したりしませんから、市ヶ谷君が自ら話さないと、噂の拡散は格段に遅くなりますね」

「なるほどな…。しかし、市ヶ谷は普段そう言つての隠すヤツじゃ無かつたな…。なのに今回は隠した…。つまり…」

「つまり、隠す理由があつたわけですね。それは何か。ここまで考えた所で先ほどの十之上先生の話で気になつた言い方が一つ」

「『相手の親族も納得した』だな」

「そう。普通こういう事件ならば、まず納得するべきは当事者であるはずです。つまり、市ヶ谷君の喧嘩相手ですね。親族を引き合に出すにしても、それなら『市ヶ谷君の親族と相手の親族双方が納得した』みたいな言い方になるべきですね。」

なのに十之上先生は『市ヶ谷君本人と相手の親族が納得した』という言い回しを使っていました。そこが非常に気になつた訳です」

…では、当事者は…？

「当事者は何らかの理由で十之上先生を始め、この高校の先生とコンタクトを取っていないんでしょう。そして最後のポイントは、相手はナイフを持っていたこと。つまり…」

相手は、その時死んだという可能性。

「有り得ないことはないでしょう。片方が凶器を持っていたんで

すから」

「で、でも、それならどうしてみんな知らない？　むしろ普通の喧嘩より騒ぎは大きいだろ？　新聞とかにだって載るんじゃないかな？」

「これも、十之上先生の言い方を踏まえての推理ですが…亡くなられた方の親族がもみ消したのではないのでしょうか」

「バカな…そんなことが」

「この事件の当事者、市ヶ谷君は正当防衛が成立するでしょうし、そうでないにしても、殺人ではなく過剰防衛か過失致死。しかも、双方未成年ですから元々そこまでビッグニュースとしてはとりあげられないでしょうし、死んだ生徒の親族に力があれば不可能ではない気がします」

力のある人間。資産家とか政治家か。

「…そして学校側も名前がそんな記事のせいで知れ渡るのが嫌って、揉み消しに協力したってわけか。

…これ、今回の事件に関係ありそうだな」

つまり、市ヶ谷のせいで人が死んだわけだ。

そしてそれをみんなで揉み消したわけだ。

死んだナイフ男の関係者がいたならば、動機は充分だろう。所詮逆恨みだが、逆恨みだけの要素はありそうだ。

「では、調べるトピックは、市ヶ谷君の喧嘩相手と、その関係者の有無ですね」

「もう一度三条鴉丸に聞いてみるか。あいつ何故か喧嘩のこと知ってたもんな」

教室に彼は居なかった。まあ、時間が時間だから生徒会室か。そう思っ僕らは生徒会室へ足を運んだ。

しかし、生徒会室にも彼はいなかった。珍しいな、生徒会室にもいないなんて、もう帰ってしまったのか。部屋の中には麓郷屋のみが座っていた。

「やあ探偵さん。捜査の方は進んでる？」

右手を広げてこちらに見せて、麓郷屋が僕に挨拶して。

「…まあ、そこそこだな。ところで今日は一人なのか？普段なら何人かがここで無駄話してるじゃないか」

「無駄って何だよ。失礼な！」

「有益なのか？」

「…無益だけどさ…」

そんなやりとりをする僕と麓郷屋を無感情に見るなな美。

「…と、そうそう。三條烏丸に用あって来たんだけど、あいつ今どこ？」

気を取り直して僕が尋ねた。

麓郷屋は首を傾げながら答える。

「あれ、そう言えば、なんかこの水の出がおかしいから屋上の給水塔見てくるって言って出て行っただけだな…」

「給水塔？ そんなのあるのか？」

僕は麓郷屋に聞いたのだが、なな美がいち早く反応する。

「ええ？ 知らなかったんですか？ この学校の重要な水資源なのに…」

そんなにおかしいか。

「ここは水がすくない土地ですから、貯水塔の一つもあるのが当然じゃないですか」

確かに言われりやそうだが、屋上なんて行かないしな…てゆうか、生徒会とか後は何かしら理由ないと行けないし。

「まあ、いいや。とりあえず屋上いってみるか」

屋上に登ると、確かに給水塔があった。

ちなみに鍵は開いていた。三條烏丸が閉めずにおいたのだろう。

屋上に更に階段がついた一メートルほどの段差があり、その上に、

高さ十メートルほどの塔が建っている。その為、僕らが屋上についたときは、三條烏丸が立っているのが見えるのみだった。

彼はなぜか体を硬直させ、その場から全く動かなかった。

…しかし、階段を昇り段差の上に立つと、彼が動かない理由がわかる。

段差の床の下には水量や水質を調節する制御系統が埋まっているようで、場所によっては、柵で立ち入れないようになっていた。

その柵の囲いの内側に、誰かが横たわっていた。

いや、そこには。かつて八神だった死体が横たわっていた。

三條烏丸はその前に立ち尽くしていた。僕らに気づいているのかいないのか。全くこちらに話しかける気配はない。

場面はしばらく凍りつく。

全てが停止する。

ずいぶんと壊れてしまった日常をたて直していくの章

八神の死体が発見されてから4日。

学校はふたたび休業と成った。

或いはもう再開しないんじゃないか。

そっという雰囲気さえ在った。

僕ら三人は街のエクセルでミーティング。

八神の第一発見者、三條烏丸は、その時はさすがにショックを受けていたようだったが、今はさすがに回復したようだ。

…少なくとも、僕らと話をしてくれるようにはなった。

「全く、ウチの学校は一体何人、人が死ぬんだろうな」

「病死、事故死ならまあ、他の学校でも間々あることだけどね。

こう、他殺が続くとな…」

「…他殺？ やっぱり他殺なのか？」

「まあ、自殺の可能性もなくはないですけどね」

三條烏丸は飲み込めないものを飲み込もうとしているかのようにだった。

「まあ、そうだよな。 あんな死体だったわけだし」

あの後僕ら（というか、主になな美）は簡単に死体を調べた。

死因はどうも窒息死で、何か柔らかい布で首をしめたらしかった。

それと、手首、足首にも、何かで縛ったような後があった。

薬物なんかを飲まれたかどうか、と言った科学的なことはわからないから、直接の死因になるかどうかは不明だが、八神矢吹は、とにかく、首を締められた。

「となると問題は、だ。 一体どうやってあそこに入ったかだな…」

三條烏丸が聞こえる程度の小声でつぶやいた。

「あ、そうか。 屋上は…」

「基本的に立ち入り禁止なんでしたね」 そろ。 前にも書いたが、

屋上に立ち入ることができるのは、生徒会の面々と、先生方に限られるのだ。

「これも密室と言うわけですか…」

なな美は呟いた。

「…いや、違うな」

そう言った僕の言葉に反応し、二人が僕を見る。

「今回は『先生』と『生徒会』なら入れるんだろ？ これはトリックなんかじゃなく、僕らにとってヒントになることだ」…と僕が言つと、三條烏丸がむっとした顔で僕に言った。

「なんだよ。犯人が生徒会の人間だつて言うのか？」

おっと、前の発言は不適切、というか不十分だったようだ。相変わらず、生徒会は仲良し集団なんだから。他の生徒会員の腹を探られるのは、自分のを探られるのと同じってわけか。

「あ、ごめん。言葉が足りなかったな。違うんだ。僕が気になっているのは『生徒会』ではなく、『先生』の方だ」

これはこれで三條烏丸は吃驚したようだった。

「この事件に、先生が絡んでいると」

「ああ。それはもう前の事件からして間違いない。だから、この事件が前の事件の続きならば、やはり先生が深く絡んでいるんだ」今回僕らは、とりあえず事件は『連続している』と考えて話を進めることにした。八神と言う人間は、少なくとも第一事件の中心にいる一人であることには間違いないからだ。

「さて、今回の事件の話は、とりあえずこれくらいにしておきましょう。それより、三條烏丸さんに聞きたいことがあるんですよ」

「なんだよ。生徒会の内部事情とかならお断りだぜ」

「残念ながら生徒会の内部事情とかには興味ないんだ。僕らが知りたいのは、以前三條烏丸が話してた、市ヶ谷の喧嘩のことだ」

質問一

「まずさ、どうやって知ったんだよ」

「えっ？」

「おまえは気づいていないのかもしれないが、あの喧嘩を知っている生徒、ほとんどいないんだぞ」

「えっ、やっぱそうなのか。良かったあんま広めないで。あのこと言ったのは、おまえだけだからな」

「で、何で知り得たんだよ」

「いや、正直知ったってほどのもんじゃないんだよ。二学期の始めに、9月の3日くらいだったかな。職員室に行ったら市ヶ谷が指導室に連れて行かれるのみてな。で、違う先生方が、なんか、喧嘩らしいみたいなこと話してたからさ、まあ、そういうことなのかなと」

「なるほど。じゃあ、直接誰かから聞いたとか、そういう訳じゃないんだな」

「そうだな。実際あの後校内でそのことに関しては何も聞かないからさ、おれの聞き違いかな、とも思ってるんだが、どうなんだかな」

「でも、市ヶ谷くんが指導室に連れていかれたのは確かなんですよ」

「ああ、それは実際におれが見たからな」

たぶん、教員たちの間でも話は錯綜してしまい、市ヶ谷が指導室に連れて行かれた時は、指導役以外の教員の中には、十之上同様ただの喧嘩だと思っていたやつがいたんだろう。

だから、たまたま三條烏丸が職員室に入った時はまだガードが緩く、少なくとも職員室では、喧嘩の『事実』が流れていたのだ。

…なぜ、その時情報が錯綜していたのか。それは…

その時はまだ事件が起きて間もなかったからだ。

「9月3日の、何時頃だ？ 三條烏丸が職員室に入ったのは」

三條烏丸は想い出すように天井をみた。

「んーと、あの日は結構生徒会の仕事してたからな…たぶん夕方の五時から六時の間ってところだな…」
なるほどね。

質問二

「相手のことについては、何か聞いていないのか？」
「さつきも言った通り、はっきり聞いたわけではないが、奥で話してた先生は確か銀龍学塾の話してたから、もしかしたらその生徒かもしれないけど…」

銀龍学塾…。

「あの、金持ちしか行かない高校か…」
「定員の八割が推薦で決まり、推薦というのは実質、『お家柄』で決まると言われているところですね」

「或いは、高額の『寄付金』を払う約束の下、推薦を有利に進めることもできるとか」

表にある裏口入学ってわけだ。

「だったら、もちろん親は『セレブリティ』でしょうね」

「ああ、もちろん」

「息子が喧嘩、まして凶器を持っていたりしたら…」

「困るだろうな」

だから、話は穏便に流された上で、『なかったことに』されて行っただ。

まあ、そんなもんだよ世の中なんて。

「でも、あの喧嘩の事件が今回のこれになんか関係があるのか？」
「確証はまだだが、恐らくは…な」

ただ、組み立てはまだ不十分だ。

平凡な表現ではあるが、組み上がっていないパズルの状態。
あるいは空間に点在してはいるが、線でつながっていない状態…。

でも…。

「第一、第二の事件は、あと一枚ピースがあれば、うまくいったら完成するかな」

「そうですね。それにはあの子の回復を待つしかないでしょう」

そう。あれ以来、いまだカウンセリングを受けている虹宮星沖。僕らと同じミス研で、しかも第二の事件の被害者の姉。

あとは、彼女の話によって、或いは真相に近づけるだろう…。

「あとは、八神矢吹の件だな」

「『どっち』でしょうね」

「さあ、『どっち』だろうな」

僕らは、この最後の事件についても、大凡二つのシナリオを描いていた。

まだ確証がないからここでその双方について語りはしないが。

もう少し経過を見れば、或いは自動的に真相が見えてくるかもしれないが、それではあまりよろしくないだろう。

ここまで死んだ人数は三人。いくらなんでも、これ以上被害者を増やさない方が無難だ。

「まあ、最後に残ったやつが犯人っていう解法も、なくはないですが」

僕が呟いた。

「…でも、虹宮はまだ回復しないのか？」

三條烏丸が僕らに問う。

「そうですね。あの日よりは大分ましになりましたけど…この先もフラッシュバックなど精神的疾患には悩まされることになるでしょうね。元々、精神的にも身体的にも脆い子ですから…」

「まあ、妹はあいつにとって一番身近かな存在だったからな。傷はかなり深いだろうな」

虹宮の障害は先天的なものだった。元々脳に障害があり、言語能

力が健常者に比べ劣っているのだ。

また、それ故に感情を上手く表現できず、一時期人とのコミュニケーションが、家族も含め充分にとれなくなってしまったため、精神的にも、病みがちになってしまったのだ。

それにつけても、どうにか普通の高校生活を送れるようにまでなつたのは、妹の星美の助けによるものであった。

星美は星沖の心の支えだったということだ。

「それだけに、あいつの所には話、聞きにいけないんだよ」

「恐らくは星見さんについて一番よく知っているのですが…」

「しかし、どうしようか。このままじゃ本当に犯人以外の関係者が全員死ぬ流れに…」

僕の言葉を、なな美が手を差し出して止めた。

「もう一人、会すべき方がいますよね」

そうだった。

虹宮のことで頭がいっぱいになって、つい忘れていた。

「謎の茶道部員だな」

質問三

「必ず最後まで学校に残っている謎の茶道部員で誰だ？」

「ああ、九十九ヶ丘のことか？」

これはあまり知られていないことだが、生徒会と言うのはやたらと遅くまで残っているのだ。

だから彼が例の茶道部員を知っている期待値は、大いに高かった。

「九十九ヶ丘？三年生か？」

「ああ。もうすぐ引退するが、一応部長だ。茶道部つてのも、意外と遅くまで残っている部だからな。それで部長の九十九ヶ丘は、先生方とも仲がよくてね。必ず戸締まりを確認するのを手伝うようになったんだ。

まあ、少し几帳面すぎる感があるけど、優しいまじめな人だよ。こ

の学年で言うと、八神に近いんじゃないかな」

僕は既に八神についていくつかの『実態』とでも呼ぶべき事実、あるいはそれに脚色された逸話を聞いたりしていたので、すでに、まじめに八神という感覚は消滅していた。

しかし、まあ死んだ人の実態を暴くと言つのも気が引けるし、八神についての話の全てが事実かどうかはわからないから、ここはとりあえず適当に同調して於いた。

「それで、九十九ヶ丘さんがどうかしたのかい？」

「九十九ヶ丘さんと市ヶ谷くんとは、なにか交流がありましたか？」

三條烏丸の質問に答える代わりとして、さらになな美が質問する。
「さあな、おれは知らないなあ。だいたいあいつと茶道部なんて全く接点ない気がするが… ま、それを言ってしまうえば、八神と市ヶ谷だつて、なにがきっかけで付き合つてたのかわからないけどな

…」

三條烏丸はその先に更に言葉を付け足そうかどうか一瞬悩んだ後止めた。そして、テーブルの上の、氷で薄くなつたカラメルマキアートのグラスに、意味もなく視線を落とした。

「九十九ヶ丘さんですか、その方とも話がしたいのですがね…」

三條烏丸は一瞬怪訝そうな顔をした。

「…ああ、でも、今は学校休みだし、おれも連絡先とかは知らないんだよ…」

「とりあえず、下の名前は何というのですか」

「ん、ああ、亞希茄だよ。九十九ヶ丘亞希茄さん」

漢字で八文字の名前の人なんて、はじめて聞いた。

それを言えば三條烏丸もかなり珍しいか…。

「でも、うーん、学校再開を待つしかないんじゃないか？」

「そうはいかないんだよ」

そう。それでは遅いのだ。もし学校が再開されたら、もう一人、死者がでてしまうだろう。

僕らの中の（生存している）重要参考人は二人。

第四の事件が仮に起きるとしたら、内一人が被害者。もう一人が加害者だろう。

なんとしても、それは阻止したいところだ。

正直言つて、もう一人死なせてしまったら、僕らはなにも事件を解決に導けていない。

ただ、犯人本人の行為によって、犯人があぶり出されただけだ。

そう、事態は意外と僕らに分が悪い。

まあ、僕らは自然といつも分が悪いのだけれど。

僕らはそこまで、三條烏丸と別れ、そのままスタバでミーティングに入る。

「さて、まだピースは少なくとも一つ足りないが、ここまでで僕らが掴んだ情報を整理してみようか」

まず、市ヶ谷の喧嘩は実際にあった可能性がたかく、相手は銀龍学院の生徒と思われる。

しかし、その事実双方の学校や、恐らくは相手方の関係者によってもみ消され、多くの人は知らない。

また、市ヶ谷には彼女がいて、その彼女もまた、この事件には関わっているかと思われるのだが、その彼女は、僕らは八神矢吹だと認識していたが、彼の妹によれば、『茶道部の子』だと言う。

ちなみに八神はやはり茶道部に所属していなかったし、していたこともなかった。

ちなみにその八神、真面目だと言う評判なのだが、実際はよく保健室へ行き、授業を休んでいた。学校関係者の大多数は、実際に体が弱いのだと信じている。

しかし、少なくとも一度、市ヶ谷と八神が同日同時に保健室に抜けている上、八神がなにものかと保健室でいかかわしい行為をし

ていたという証言もあり、単なる病弱、ではないようだ。

9月2週目の水曜日から市ヶ谷は学校を欠席。ただ、二限の頃に目撃者があり、教室に顔を出さなかっただけで、学校には来ていたと思われる。

翌日の放課後、僕らが市ヶ谷の死体を時計塔内部で見つける。時計の遅れ具合から推測して、彼が歯車に押し込まれたのは、前日の昼頃と思われる。

さらに同日夕方、虹宮星沖が妹、星見の他殺体を発見する。死亡推定時刻は調査により、前日夜九時頃とわかる。

しかし、その時刻には、この校舎は完全に施錠されるので、これは一種の密室殺人というものである。

後日、保健室の先生に確認したところ、冷凍室の中が全てなくなっており、中が伽藍堂になっていたという。

また、他のキーパーソンとして教師、十之上がいる。

彼は、市ヶ谷の喧嘩に関して事情を知っている可能性がある。

ちなみに9月3日当時、彼は喧嘩事件の全体像をあまり把握できておらず、市ヶ谷に厳しくあたってしまったが、その後、市ヶ谷の正当防衛性が見えたため、態度を変化させたとのこと。

また、彼は星見に度が過ぎた好意を抱いていて、星見からはすこし嫌がられていたという話もある。

また、彼は八神をよく知らない、と言う。

僕らがここまで調べた、先週木曜日、八神の死体が発見。今回は柔らかい布で首をしめられた窒息死。発見場所の屋上は一般生徒は立ち入れず、入れるのは基本的に先生と生徒会だけだ。

そして最後。この学校の窓や各ドアの施錠を確認するのは九十九ヶ丘亞希茄。三年の茶道部長である。

ただ彼女は屋上の鍵は入手できるポジションにはいないと思われるので、屋上への侵入は通常不可能であると思われる。

「とまあこんな所か」

「いえ、一つ重要な噂話を削除してしまっています」
そうだった。

もう一つ。

八神は、教師をゆすっていたか、あるいは教師とただならぬ関係にあったと言っ噂がある。

「これだろ？」

「そう。それは非常に重要な鍵ですよ」

「さて、これから調べたいことは…」

九十九ヶ丘亞希茄さんについて。

9月3日の喧嘩について。（事実確認）

星見について。

…こんな所かな」

「そうですね。容疑者が二人に絞られている今、他の謎や状況証拠は、そのままにしておいてもある程度差し支えないでしょう」

さて、シナリオはもう少しで完成する。

さっきも言った通り分は確かに悪いが、いずれにしても、この探偵ごっこももう少しで終焉ってわけだ。

僕らはもうひと頑張りの気合いを入れ、スタバをあとにした。

さらにその後、僕らは銀龍学院の近くのカフェに入る。

もちろん銀龍学院の生徒を待ったためだ。

「どうせなかには入れないでしょうし、入っても先生からはなにも情報は得られないでしょうから、外を歩く生徒から話を聞いた方がいいでしょう」

時間は午後2時。普通の生徒は下校し始める時間の筈だ。

僕らは窓から銀龍学院へ伸びる道路を見ていた。

人通りの多い通りで、僕らがいまいるようなカフェやファストフードなどの飲食店や雑貨屋など、学生向けの店がたちならぶおしゃれな感じのするところだ。

「ま、銀龍にはふさわしいってところか」

まだ、高校の制服を着ている人はいない。それでも、多くの人が行き来する。若い人が多い気がするけど、大学でもあるのだろうか。

十分ほど経つと、ちらほらと制服を着た人が交差する人の流れに混じり始める。

少しずつ、私服の人の流れを、制服が浸食していく。

僕はそれを眺めている。

「そろそろいかないのか？」

と、僕が聞いたちょうどその時、三人の男が店に入ってきた。三人とも髪を明るめに染め、なんだか、軽そうな感じ。

夏服の上の方のボタンを開け、なんともたるそうにしていた。

「あの人たちに聞いてみましょうか」

そういうと彼女はつかつかと一人男の群れに近づいていく。で、

おい、それは攻めすぎじゃないか？

色々危険だったりするんじゃないか……。

僕の背では（その席は僕の位置からだと背後にある）なな美のかわい子ぶった声が聞こえたのを皮きりに、なんだか盛り上がったいった。

僕は怪しまれるのがイヤなので、知らないふりをしていた。

意外とうまくいくもんだな…やっぱりこうゆうときは女の子ののかな…。

しばらく盛り上がったかと思うと、今度はなんだか声のトーンが下がったかのように思える。

決して敵対的な雰囲気には聞こえないが、楽しい話をしている風でもない。

逆に、うまく聞き込みが進んでいるって事か。

しばらく知らないふりをして、僕は窓の外を眺めていた。

いまが下校のピークらしく、私服と制服は半々くらい。同じ高校生でも、僕の高校とはだいぶ雰囲気違った。隣街に來ただけだって言うのに、こんなにも違うとは。まあ、銀龍学院は特別なのだろう……けど。

五分ほどして、なな美は戻ってきた。

喜々としたその表情からして、収穫はあったようだ。

「どうだ。喧嘩のことはわかったか」

なな美はすこしもったいぶってから、質問に応える。

「いえ、喧嘩については彼らは何も知りませんでした。

……ただ、9月3日にある男子生徒が『不慮の事故』で亡くなった
そうですよ」

ほう。

不慮の事故、ね。

「生徒の名前は十三田巳波。『みなみ』って言ってももちろん男の子ですよ。

『不思議なことに』、曰く付きな芸能人よろしく、親族のみの完全な密葬だったため、学校関係者は全く葬儀に参列していないそうです」

「まあ、葬儀に出たら、多少なり、遺体を見ることになるからな」
確率が低いとはいえ、刺し傷が人目に触れることを危惧したのだろう。

まあ、その巳波くんが、市ヶ谷を襲ったとみて、間違いないんだろう。

「十三田くんは、学校内では多少悪ぶった生徒で、喧嘩なんかはよくやっていたようですよ。あくまで噂ですけど」

「ま、火のないところにはなんとやら、だしな。よりによって9月3日だって言うんだから、間違いないだろうね」

そして、なな美はまだ得意気顔。まだなにかあるようだ。

「実は、もう一つ『気になる』話を聞いたんですよ」
「というと？」

「実は、十三田くんは二年生なんです、私たちの高校に、年下の女の子の知り合いがいるらしいんです、

.....

それも、

その子には、

双子の姉がいたとか」

次に会う相手が決まった。

しかし、その子と事件の話をするのにはさすがのなな美も気が引けるようで、その日の内に彼女の家に直行することはしなかった。

そこからしばらく僕は動きを止めた。

ミーティングもせず、取り調べをすることもなかった。

全てはあと一歩なのに。

僕は秋の夜長を一つ、また一つと、もどかしさを感じながら渡った。

学校が始まるまでは安心だが、安心なのは学校が始まるまでだ。

学校が始まるまでにシナリオを提出しなければ、僕らは敗北者だ。エンディングは迎えられるが、所詮は4人が犠牲になるバッドエンド。

シナリオはあと一ページだけ。

そんな中、遂に学校が再開されることになった。

再開は10月5日から。そういえば、もう10月になっていたんだな。

とりあえず何かしなくちゃ、と言う気持ちで、僕は市ヶ谷の妹に

会いに行く。

彼女にも確認事項が一つあるのだ。

「どう？ 犯人はわかりそうなの？」

第一声、大月は僕に尋ねた。僕は、まあ、と微妙な返事をしておいた。

それにしても、兄を亡くしたにしては、こちらは随分と普通だ。事件前にも会ったことは何度かあったが、その時と印象は殆ど変わらない。暗くもなければ、無駄に明るくもない。

強いというか……ドライというか。

「それで、聞きたい事って？」

彼女は話を促す。

「あのさ、葬式の時に、九十九ヶ丘って人いなかった？」
変わった名前は、こう言うときには便利だ。

いれば人の印象に残るから。

「あ、いたいた。亞葵茄さんだよ。確か。直接話はしなかったけど、なんかキレイな人だったみたいよ」

「やっぱりそうか。どうも、その子が本当の彼女のようだ」

僕的にはなかなかのスクープのつもりだったが、大月はさほど驚かなかった。

「へえー。やっぱり茶道部の人？」

「ああ」

「でも、じゃあ八神さんは何だったの？ 先日殺されちゃったんでしょ？」

大月は、含みがあるのかないのかわからない調子で言う。

そう。実際八神と市ヶ谷が一緒にいるところは目撃されている。

最早事件のピースとして不要だから本腰で調べてはいなかったが、

あいつらは一体……？

その時、僕はもう一つ別の、より真実的で合理的なシナリオを組み上げた。

事件に不要なピース？

本当に？

ひよつとしたら全く逆なんじゃないか？

事件の核はそこにあるんじゃないか？

八神は市ヶ谷に何かを要求していたって話があった。

八神と市ヶ谷が会い始めたのが9月以降なら話は簡単だ。

恐らく喧嘩のことでゆすったんだろう。この事件は学校ぐるみで隠してたわけだし、いくら正当防衛とは言え、人を殺したことを知られたくない、というのはあるだろうし…。

ただ、実際に八神と市ヶ谷が付き合っているって噂は8月からあった。

考えられるのは、ゆするネタは事件とは別のことで、もっと前の時点から市ヶ谷に関係することである。

或いは、元々は八神は市ヶ谷をゆするつもりはなく、何らかの理由で二人はあっていたが、八神は事件のことを知り、ゆすり始めた。いずれにしても謎は残る。

前者ならそのネタは一体何なのかって話になるし、後者なら何故二人は会っていたのか…。

市ヶ谷の彼女は九十九ヶ丘に間違い無さそうだし、八神の彼氏も別にいると思われる。

互いに二股だったんだろうか。

八神は最早それ位のことはやりそうな感じがするが…市ヶ谷はちよつとそうは見えないが…。

かといって、例の喧嘩以外のことでは、市ヶ谷をゆするようなネタって何だ…？

市ヶ谷は確かに、決して模範的学生と言うわけではなかったものの、それ程後ろめたい話も聞いたことがない。それは市ヶ谷本人に限らず、市ヶ谷の家族についてもだ。

決して普通の家族の範疇に収まらない家族ではなく、やはり後ろ

めたいことは聞いたことがないが…。

「こんなことはちよつと聞きづらいんだけど、夏休み頃に、家族でなにか変わったことつてあった？」

僕は目の前に大月がいるのを思い出し、彼女に尋ねる。

「ええ？変わったことつて…どんな？」

「何でもいいんだけど」

具体例はあげにくいんだけど…。

「そうだなあ…うーん、たぶん兄ちゃんに彼女できたことが、一番のニュースだったと思うよ。それ以上のことはないかな…」

あ、そうか。なにも家族とは限らないんだ。

丁度そのころ彼女が出来たんだとしたら…。

…彼女、つまり九十九ヶ丘亞葵茄に關すること何か弱みを握られていたのか…？

目の前では大月が首を傾げている。

やっぱり九十九ヶ丘亞葵茄の話の聞かない訳には行かなそうだ。

本人と、そして関係者をあたってみるか。

僕はそのあとしばらく無駄話をしたあと、市ヶ谷家をあとにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4714f/>

何がなんだかかわからない日常の破壊について。

2010年10月11日05時43分発行